

Mon favori

～モン・ファヴォリ～

高層ビルがひしめくオフィス街の一角に、『喫茶あずさ』はある。こちんまりとした店の中には、挽きたての珈琲「ドビ」の芳しい香りがいつも満ちている。

朝の定番メニューは、珈琲に厚切りの半トースト、そしてゆで卵が一個ついた四百円のモーニング。

里谷綾子さしやあやこは、それを食べてから出勤するのが日課となっている。

この春、綾子は地元を卒業し、実家から電車で二時間の街で就職した。

祖父母に両親、兄二人、姉一人と住んでいた古い平屋ひらやから一転、現在は築五年のワンルームマンションで生活している。二十二歳にして初めての一人暮らしだ。

それにともない、食事を一人で取ることが格段に増えた。

会社の先輩と夕食をともにすることはあっても、朝食は必然的に一人だ。

残念ながら、一緒に朝を迎えるような恋人もいない。

一人の食事は味気なくて、綾子はすぐに朝食を取らずに出勤するようになった。

ところが、一人暮らしを始めて一月ほど経ったある日の朝。寝ぼけ眼のまま会社までの道のりを歩いていった綾子は、あたりに漂う芳しい珈琲の香りに、ふと足を止めた。

それまで覗いたことのなかった細い路地に目を向けると、小さな店がある。そして店先をほうきで掃いている人がいた。店の扉は大きく開かれていて、珈琲の香りはそこから漏れているようだ。

綾子は特別珈琲が好きなのではないが、この時は何故か無性に飲みたくなった。

腕時計を見ると、始業時間まであと三十分はある。

ここから会社まで五分とかからないので、珈琲を一杯飲むくらい平気だろう。

けれどその店は、気軽に入れるカフェとは違い、いかにも「純喫茶」といわんばかりの佇まい。

常連さんが多そうな雰囲気、一見さんが入るには少し勇気がいる。

綾子が逡巡していると、彼女に背を向けて店先を掃いていた人物が、かがめていた腰を伸ばして振り返った。

(わーお……)

綾子は思わず、心の中で声を上げた。

朝日を反射して輝く見事なスキンヘッドに、真っ黒なサングラス。加えて、口をぐるりと囲む黒々とした髭。

どうにも堅気に見えないその姿に、綾子の自衛本能が慌てて「回れ右！」と指示を出す。

しかし、綾子が踵を返すよりもわずかに早く、その男は髭を生やした口元に笑みを浮かべて

言った。

「おはよっ、お嬢さん！ 珈琲飲んでく？」

つるつるびかびかスキンヘッドの強面男は、『喫茶あずさ』の店主だった。

店名の「あずさ」は彼の名前らしい。話してみれば、実に気さくな人物だった。

店内には二人掛けのテーブル席が四つと、一番奥にソファ席が一つ、そしてカウンター席が七つ。カウンター席の中央に案内された綾子がメニューを見ると、こだわりの珈琲以外は、サンドウィッチやパンケーキなどの軽食だけ。

ランチはやっていないが、朝はモーニングサービスを提供している。

綾子がモーニングを頼むと、マイルドなモカブレンドに半トースト、ゆで卵が出てきた。

半トーストのバターの量も、ゆで卵の黄身が半熟なところも、綾子の好みにぴったりだ。

綾子は、この店のマスターと朝ご飯をすっかり気に入ってしまった。

そうして、毎朝『喫茶あずさ』で三十分ほど過ごすようになると、店内にいる客の顔ぶれは、大體いつも同じであることに気がついた。

と言っても、常連客はスーツを着込んだ年高の男性ばかりなので、綾子が彼らと交流することはない。

お決まりの朝ご飯に舌鼓を打ちながら、マスターと他愛ない話に花を咲かせるだけ。

ただし、綾子には気になる客が一人いた。

その人は、毎朝決まって奥のソファ席を陣取り、新聞を読んでいる。

いつも顔の前で新聞を大きく広げているので、綾子からはその人の顔がまったく見えない。分かることと言えば、他の常連客同様、スーツ姿の男性だということくらい。

その人は、いつだつて綾子より先に店に来ている。その上、彼女より早く店を出たこともない。『喫茶あずさ』でゆつくりと朝の時間を過ごすのが彼の日課らしい。マスターは綾子が席を立つ頃、必ず彼に珈琲コヒーのおかわりを出していた。

ところが、そんな日々が一月ほど続いたある朝のこと。

「マスター、ごちそうさまでした。行つてきます」

「行つてらっしゃい、アヤちゃん。今日も頑張つてね！」

綾子はマスターに百円玉を四枚渡し、店を出ようと扉を開けた。

すると、新聞を折り目通りに畳み直し、例のソファの男も立ち上がった。

彼は珈琲の代金とともに新聞をカウンターのの上に置き、綾子に続いて店を出ようとする。

店先に出た綾子は、とつさに扉を片手で押さえ、彼を待った。すると、男は柔らかく微笑ほほえんだ。

「ありがとう」

「……いえ」

綾子は驚いた。彼は、想像していたよりも随分ずいぶんと若い男だったのだ。

自分よりは年上だろうが、他の常連客に比べると格段に若い。

男は綾子が押さえていた扉に手をかけると、丁寧ていねいにそれを閉じた。

扉の上部に取り付けられた鐘がカランカランと鳴る。

同じタイミングで店を出たと言っても、二人は知り合いではない。

それぞれのペースで歩くと、コンパスの違いのせいで必然的に男の方が先に行くことになった。

じろじろ観察するのは失礼かと思いつつ、綾子は彼の後ろ姿を眺めながら歩いた。

ダークスーツをかつこよく着こなし、革の靴はピカピカに磨かれている。

落ち着いた色合いに染められた髪は、かつちりというよりは洒落しやれな感じに整えられていて、上品で洗練された印象を与えた。

背筋をまっすぐ伸ばして颯爽さつさつと歩く姿は、いかにも仕事ができるビジネスマンという雰囲気。高層ビルが建ち並ぶオフィス街に、よく似合っていた。

一方の綾子はどうと、比較的カジュアルな服装をしている。内勤事務である彼女は、スーツで出勤する必要がないのだ。

この日の格好は、先日会社帰りに先輩と挑んだバーゲンでゲットした、パステルカラーのワンピースにオフホワイトのカーディガン。エナメルが気に入って購入したパンプスはヒールが高めで、実は少し苦手。学生時代はかかとの高い靴をほとんど履はかなかつたので、どうにもまだ慣れない。

歩きづらいヒールのせいで、前を行く男との距離は余計に開きそうなものだが、彼は随分ずいぶんのんびりと歩いているらしく、その背中はまだ綾子のすぐ前であった。

綾子が再び驚いたのは、彼が入っていたビルを見た時だった。

何故ならそこは、綾子が勤める会社がテナントとして入っているオフィスビルだったからだ。

(全然知らなかった……同じビルに勤めてたなんて……)

綾子が目を丸くしている内に、男は玄関ホールを進んでいく。

綾子もそれに続くようとして、はたと足を止めた。

このままビルに入れば、彼と一緒にエレベーターに乗ることになるかもしれない。

綾子の勤めるオフィスは、この十六階建てビルの三階にある。一、二階はオフィスフロアではないので、彼もエレベーターを使うだろう。

何となく同じエレベーターに乗るのがはばかれて、綾子はそのままビル一階にあるコンビニへ足を向けた。

雑誌コーナーに立ち寄り、目に付いた女性誌をばらばらと捲る。

何気なく巻末の星占いページを見ると、綾子の星座の欄にはこう書かれていた。

『恋愛運——思いがけない相手からのアタックあり』

(思いがけない相手って、誰だろう……)

綾子は首を傾げつつ、女性誌を棚に戻す。それからお茶のペットボトルを一本購入すると、ようやくエレベーターへと向かった。

綾子の勤める会社は、欧州雑貨の輸入販売を行っている。販売先は、モデルルームや飲食店などのインテリアアクセサリーを請け負う企業がメインである。

社長は優しい老紳士。大企業の重役を引退して、今の会社を立ち上げたとの噂だ。

そんな社長の右腕とも言えるのが、綾子の母親ほどの年齢の女性営業部長。

彼女の下には、男性二人と女性一人の個性豊かな営業社員達が続く。

そして、綾子がオフィスで一緒に過ごす時間が一番長い、経理事務の女性が一人。

『株式会社 Mon favori』は、総勢七人の小さな会社だ。ちなみに Mon favori は、フランス語で「私のお気に入り」を意味する。

国内での仕入れの交渉はもっぱら社長と部長が行い、現地での買い付けは部長に一任されている。その中からクライアントのニーズに合った商品を選定して提案するのが、営業の仕事だ。

綾子の主な仕事は、電話の応対や雑務、営業に頼まれた資料の作成である。

朝礼が終わると営業達は外回りに出掛け、社長もふらりと姿を消すことが多い。よって、日中はだいたい経理の小池と二人きりで過ごす。

電話番号をしなければいけないので、昼食も、いつも社内と一緒に食べている。

「もうすぐお昼ね。私はきりがいい所まで仕事しちゃうから、アヤちゃん、先に何か買っておいで」

「あ、はい。ありがとうございます」

小池の言葉に甘えて、綾子は財布を片手にオフィスを出た。

ずっと実家暮らしで料理なんてしたことなかった彼女に、弁当を作ってくるという発想はない。そのため、昼食は外で調達してくるのだ。

ビルのエレベーターは全部で六機あるが、正午ともなると昼休みの人々でいっぱいになる。

しかし、この日は小池が早めに送り出してくれたので、三階のエレベーターの前には誰もいなかった。

下の階行きのボタンを押し、しばらくして開いた扉の中に身を滑り込ませる。

そしてすぐに、綾子は「あ」と小さく声を上げた。

エレベーターの奥に見覚えのある人物——今朝、勤め先が同じビルだと判明したあのビジネスマンがいたからだ。

向こうも一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに笑みを浮かべて会釈してきた。

綾子も慌てて、ぺこりと小さく頭を下げる。

エレベーターには他にも人が乗っていたので、そのまま言葉を交わすこともなかった。

ところがエレベーターを降りてビルを出たとたん、いつの間にか隣に並んでいた彼に声を掛けられた。

「こんにちは」

「あ、こ、こんにちは」

立ち止まって戸惑った顔をした綾子に、彼は「急に声を掛けてごめんね」と苦笑する。

道の端に寄った二人の横を、同じビルから出てきた人々が通り過ぎていく。

「毎朝、あずきで会うよね」

「あ、そうですね……」

「同じビルに勤めていたなんて知らなかったな。今から昼飯？」

「えっと……は」

男の口調は柔らかく穏やかだったが、綾子は緊張しながら返事をした。

毎朝同じ喫茶店に通っているとはいえ、綾子が彼の顔をまともに見たのは今朝が初めて。ましてやこうして話をするのも、これが初めてなのだ。

他の常連客と比べて若いと思った彼は、今年三十になったばかりの綾子の下の兄と同じ年頃に見える。

すっと通った鼻筋と薄い唇に、切れ長の目。

垢抜けた印象を与える端正な容貌は、田舎者の綾子をいくらか身構えさせた。

男は綾子の緊張に気づいているようだったが、言葉を続ける。

「よかったら、一緒にどう？」

「え？」

「昼飯。美味しい店、知ってるんだけど」

まさか、いきなりランチに誘われるとは思ってもいなかった綾子は、ただただ驚いた。

「あ、えっと……」

そこで、小池を待たせていることを思い出し、綾子は慌てて口を開く。

「あの、ありがとうございます。でも、同僚がオフィスで待っているので、今日は外でゆっくり食べてはいられないんです」

「ああ、そっか……」

「せっかく誘っていただいたのに、すみません」

「あ、いやいや。こっちこそ、いきなりごめんね」

綾子がびよこんと頭を下げると、男は「また次の機会に」と微笑んで、胸ポケットから名刺を取り出した。綾子はそれを両手であたふたと受け取り、自分がまだ名刺を支給されていないことを告げる。

彼は「気にしないで」と言い、勤め先を尋ねてきた。

「三階の、モン・ファヴォリに勤めています」

「——君の名前も聞いていい？」

「里谷といいます」

「里谷、アヤさん？」

「え？」

「ああ、ごめん。あずさのマスターが、いつも「アヤちゃん」って呼んでたような気がしたから」

「あ、はい。綾子といいます」

「里谷綾子さんだね、ありがとう。僕は猪野忍。引き止めて、ごめんね」

男はそう言うと、「じゃあまた」と微笑んで去っていく。

いつの間にか、ビルから出てくる人が増えていた。

彼の姿が人波に吞まれていくのを見送ると、綾子は手にした名刺に視線を落とす。

「猪野……」

名刺には、『猪野商事株式会社 代表取締役専務 猪野忍』と書かれていた。

会社の住所は、綾子の勤め先も入っているビル——猪野ビルの最上階。

猪野商事は、このビルのオーナーでもある有名企業なのだ。

あの若さで、そんな大会社の専務とは。

彼——猪野忍が、ビルオーナーの親族だということは綾子にも分かった。しかし——

「何で……私？」

綾子は猪野忍の名刺を見つめたまま、大きく首を傾げた。

彼はいったい何故、自分のような垢抜けない小娘をランチに誘ったのだろう。その上、「また次の機会に」と言っていた。

（ううん、次なんて、きつとないよね。あんまり意識しないでおう……）

綾子はそう思いながら、名刺を財布の中にした。

綾子が猪野忍なる人物からランチに誘われたのは、金曜日のこと。

Mon favori は土日が休日なので、その二日間、彼と顔を合わせる機会はなかった。それに、綾子は法事のため実家に帰っていた。

そして月曜日——週始めとなるこの日、綾子は朝寝坊をしてしまった。

土日に上げ膳据え膳でちやほやされたため、少しばかりだらけていたのだ。会社の最寄り駅に到着したのは、始業時間の十五分前。

ほのかに漂う珈琲の香りに後ろ髪を引かれつつ、綾子は『喫茶あずさ』のある路地を通り過ぎた。その日の昼休み。

「アヤちゃん、今日は外でゆっくり食べておいで。私はお弁当持ってきてるから」

「あ、はい。ありがとうございます」

小学生と中学生の息子がいる小池は、子供の行事ついでに、たまにお弁当を作ってくる。そういう日は電話番号を一人で引き受けて、綾子をランチに送り出してくれるのだ。

時刻は、エレベーターが昼食に出掛ける人々で溢れる少し前の十一時半。

小池に見送られてオフィスを出た綾子の頬は、わずかに緩んでいた。

何故なら彼女は今、懐がとても暖かいのだ。

帰省中、家族全員が、小遣いをくれたおかげである。

曲がりなりにも社会人となった二十二歳。そんな自分にお小遣いもないだろうとは思ったが、祖母や両親、年の離れた兄や姉は、一人都会に出て働き始めた末っ子が心配でならないらしい。

帰り際には地元駅まで見送りに来て、いつでも帰ってこいと言ってくれた優しい家族。彼らの顔を思い出しつつ、綾子はどこで何を食べようかな、とわくわくしていた。

エレベーターを降り、鼻歌でも歌い出したい気分で玄関ホールを通り抜ける。と、そんな上機嫌な彼女を呼び止める声があった。

「里谷さん」

「あ……」

猪野忍——先日、名刺をもらって名前を知ったばかりのビジネスマンだ。

そういえば、今朝は『喫茶あずさ』に寄れなかったので、彼とも会わなかった。

綾子は、近付いてきた長身の彼を見つめる。彼は綾子の前に立って、口を開いた。

「今朝、あずさに来なかったから、具合でも悪くて会社を休んでいるのかと思ったよ」

「あの……ちよつと寝坊しちゃって……」

綾子が恥ずかしそうに打ち明けると、彼は「元気そうでよかった」と、ほっとした様子で微笑んだ。

「今から、お昼？」

「はい」

「今日は、誘ってもいいかな？」

「えっと……」

本当にまた誘われると思っていなかった綾子は、少し戸惑った。何故、彼は自分をランチに誘うのか。彼の意図が分らず眉を下げた綾子だったが、ふとあることに気がついた。

就職してまだ二ヶ月ほど。オフィス内で昼食を取ることが多い綾子は、職場周辺の店に詳しくない。せつかく懐が暖かいのだから、奮発しておいしいものを食べたいと思っても、どの店がいいのか分からないのだ。

しかし、明らかに年上で、大会社の重役を務める猪野は、この界限かがいで長く働いているのではなからうか。だったら素敵な店を知っていそうだと考えた綾子は、彼の誘いを受けてみることにした。

「あの、よろしく願います」

「よかった」

嬉しそうな笑みを浮かべた猪野を見て、綾子は少しだけ肩の力を抜いた。

綾子が連れていかれたのは、猪野ビルから歩いて五分ほどの場所にある店だった。オフィス街には不釣り合いな、古民家風の一軒家である。表に看板が出ていないので、一見しただけではそこが店とは分からないが、猪野の話によるとイタリアンの老舗らしにせらしい。

二人が通されたのは窓際の席で、木枠の窓からは小さな中庭が見える。

人気店のようで、前菜が運ばれてくる頃には店内が満席になっていた。

前菜は生ハムとルッコラのバルサミコ風味のサラダ。それをつつきながら、猪野が口を開いた。

「里谷さんは、この春の新入社員かな。どうして今の会社を選んだの？」

「私が選んだというか……私なんかを採用してくださったのが、今の会社だったんです」

「うん？ それはまた、えらく謙遜けんそんするね」

「だって……」

綾子は里谷一族の中で、年が一番若い。家族や親戚達に可愛がられて育ち、そのせいか田舎いなかの生活に不満を感じたことはなかった。とはいえ、都会に対する憧れも抱いており、それは年々膨らふくらんでいった。

でいった。

大学四年生の時には、周りが用意してくれたコネをことごとく断り、県を跨またいで就職活動に精を出した。しかしながら、あちこちで就職難が叫ばれている昨今、特別なスキルも資格もない田舎の小娘に対し、都会は厳しかった。

ありとあらゆる企業に履歴書を送りまくったものの、ほとんどが書類審査で落とされ、面接までこぎ着けたのはわずか三社。その内の一社である Mon favori で雇ってもらえたのは、本当に幸いなことだった。

ただし、入社後に聞かされた採用理由は、綾子にとってあまり誇らしいものではなかった。

「——え？ 扱いやすそうだったから……？」

「そうなんです……田舎っ子で、従順そうだと思ったんですって……」

「……なるほど」

拗ねたように口を尖とがらせた綾子を見て、猪野は優しく目を細めた。

その後すぐに運ばれてきたアマトリチャーナのトマトの香りに、綾子はぱあっと顔を輝かせる。

そんな彼女の様子に、猪野は小さく声を立てて笑うと、続けて言った。

「でも、素直な子っていうのは将来伸びる。社長は、君に期待してるんじゃないかな？」

「そうでしょうか」

「いくら優れたスキルがあっても、ひねくれた人とは仕事がしにくいものだよ。頑かたくな固定観念に縛られている奴も、上司としては扱いにくいね」

実際、今の会社の居心地はどう？ と聞かれ、綾子は顔を綻ぼせた。

一族の中で末っ子として育った綾子は、会社でも一番年下の新米社員。

まだまだ一人前とは言いがたいが、彼女を見守る周囲の眼差しは温かい。

特に社長は、孫ほどの年齢の綾子をいつも気にかけてくれている。大事なお嬢さんを預かるのだからと言って、入社日にはわざわざ田舎の両親に挨拶の電話まで掛けてくれた。

「自分がお役に立っているかどうかは分かりませんが、楽しく勤めさせていただいています。今の会社に採用していただいて、本当に感謝してます」

「そうか、それはよかった」

綾子にこりと微笑むと、猪野も柔らかく笑った。

まだ知り合って間もない相手とのランチ。

初めこそ緊張していた綾子だったが、猪野の巧みな話術と穏やかな雰囲気のおかげで、ドルチェと珈琲がテーブルに並ぶ頃には、すっかりリラックスしていた。

本日のドルチェはベイクドチーズケーキ。

上にかかったベリースソースの赤と、添えられたミントリーフの緑が美しい。

絶妙な甘さにほっぺが落ちそうだと感激した綾子に、猪野は自分の分のケーキも食べさせた。

珈琲は、イタリ안의店だけあって少し濃いめ。ケーキと一緒に食べてちょうどよい苦味だった。綾子はふと思ったことを口にした。

「珈琲に詳しくないので、何を飲んでも大体おいしいとは思いますが……『喫茶あずさ』の珈琲

は、特別おいしいように思います」

「そうだね。あそこのマスター、客に合わせてそれぞれ味を変えてるって知ってた？」

「えっ、そうなんですか？」

「あの人、人間観察が趣味だからね。いつの間にか珈琲の好みも分析されてるんだよ」

「えー、すごい！ 全然知りませんでした！」

猪野と『喫茶あずさ』の付き合いは長く、彼は七年前の開店当時から足を運んでいるそうだ。

そこで綾子は、七年前にはもう仕事をしていたという猪野の年齢が気になった。

「あの、おいくつなんですか？」

「ん？ 僕？ 三十二だよ」

「あ、上の兄と、同じです」

「そうか……お兄さん、ね」

猪野はそう言って、何故か少しだけ困ったように眉を下げた。

その後の会計は、猪野が綾子の分も払ってくれた。

知り合ったばかりで奢ってもらうのは申し訳ない。

綾子はいつになく懐かぬ事情も訴えたが、彼は「せっかくのお小遣いは大事にとっておきなさい」と笑って、お金を受け取らなかった。

そうして気がつけば、昼休み終了まであと十分となっていた。

急いで猪野ビルまで戻ってエレベーターに乗り込み、綾子は改めて猪野に礼を言う。

「今日はごちそうさまでした。とつてもおいしかったです」

「それはよかった。僕の方も、付き合ってもらえて嬉しかったですよ」

猪野は微笑み、綾子が三階で降りる時に「またね」と告げた。

その言葉を聞いたとたん、綾子は胸がどきりと高鳴ったような気がして、少し戸惑った。

会社に戻ると、小池は食後の紅茶を飲んでいたら、綾子に気づいた彼女は、「あら、ほっぺを真っ赤にして、どうしちゃったの？」と微笑んだ。

2

翌朝。綾子は少し早めに家を出て、いつもより一本早い電車に乗った。

そして、前日は寄れなかった『喫茶あずさ』の扉を開ける。

奥のソファ席に猪野の姿があるのを確認すると、綾子はマスターに声を掛けた。

「おはようございます。あの……」

「おつはよう、アヤちゃん！ 昨日は寝坊したんだって？ 何だったらおじさん、毎朝モーニング

コールしよつか？」

髭に囲まれた口をにんまりさせたマスターに、綾子は「結構ですー」と笑って返す。

そしていつもの席に腰を下ろし、バッグから財布を取り出して言った。

「あのね、マスター。猪野さんのお会計、今日は私に払わせてください」

「うん？ 猪野さんって……ああ、シノブちゃんのことかな？」

「し、しのぶちゃん……？」

マスターと綾子のそんなやりとりが聞こえたのか、猪野は新聞から顔を上げてカウンター席を見た。ソファ席に目を向けた綾子は彼と目が合い、ぺこりと頭を下げる。

「猪野さん、おはようございます。昨日はありがとうございました」

「うん、おはよう。ところで、会計って……？」

猪野はそう尋ねて、新聞を畳みながら近付いてくる。

綾子が「昨日のお礼に、ここのお代を払わせてください」と言うと、彼はわずかに眉を上げた。

そんな彼を見て、綾子は困ったように続ける。

「お値段、全然釣り合わないですけど……」

「値段は関係ないよ。じゃあ今朝だけ、律儀な君に甘えておこうかな。けれど、次からはお返しなんて考えないで」

その言葉に、綾子は「次……？」と呟き、きよんととして首を傾げる。

とそこで、「ちよつと、待ったあー」と声を上げたのは、『喫茶あずさ』のマスターだった。

「おいこら、シノブちゃんのタラシっ！ うちのお客を気安く口説かないでよねっ」

「悪いけど、我々はただの客同士じゃないんだな。この後、向かう先が一緒なんだぞ」

「何い！ そりゃ一体、どういうことなのっ!？」

その後、綾子と猪野の会社が同じビルにあると知り、マスターは「世の中って狭いね」と驚いた様子だった。一方、綾子は二人のやりとりを眺めながら、先ほどの猪野の言葉について考えていた。「里谷さん、さつきから何を不思議そうな顔してるんだ。もちろん、また昼飯に誘うつもりだよ？」猪野はそう言つて、今日のお昼の予定を尋ねてくる。

しかし残念なことに、今日のは經理の小池が子供の授業参観で休み。綾子はオフィスの電話番号を任されることになっていた。

昼食はコンビニであらかじめ買つて行くつもりだと話すと、気を利かせたマスターが、テイクアウトのサンドウィッチを作ってくれた。

それを持って、綾子は猪野と一緒に『喫茶あずさ』を後にする。

猪野ビルに到着してエレベーターを待っている時、綾子は彼から小さなメモを渡された。

「また、ランチに出られそうなのはメールして。他にもおいしい店をたくさん知ってるから、案内するよ」

「ありがとうございます」

二人はエレベーターに乗り込み、綾子はいつもどおり三階で降りた。

扉が閉まつて猪野の姿が見えなくなった瞬間、かすかに覚えた感情に首を傾げる。

綾子には兄が二人いるので、相手が異性だという理由で緊張することはない。それに、人見知りもしないタイプだ。

最初は、猪野のスマートな立ち振る舞いと野暮つたい自分を比べて少し畏縮していたが、すぐ

に打ち解けた。彼の優しい眼差しは親兄弟のそれに通じるものがあり、綾子をどこかほっとさせる。エレベーターで別れる際、離れ難いと思つてしまったのは、きっとそのせいだ。

綾子はそう思おうとした。

「社長、おはようございます」

「おはよう、綾ちゃん。今日もよろしくね」

綾子がオフィスに入ると、社長がデスクの前で新聞を広げて寛いでいた。

ロマングレーの髪を綺麗に撫で付け、上品なスーツを身にまとつた素敵な老紳士。彼こそ綾子の雇い主——『株式会社 Mon favori』の猪野耕平社長だ。

そういえば社長の姓も猪野だったなと思いつつ、綾子は珈琲の用意をしに給湯室へ向かう。誰よりも早く出社する社長に朝一番の珈琲を淹れるのは、綾子の役目である。

湯気の立つカップを差し出すと、社長は温和な瞳を綾子に向け、「ありがとう」と微笑んだ。

「綾ちゃん、今日は一人で留守番を頼むことになるけれど、大丈夫かな？」

「はい、大丈夫です。社長は五時のお戻りですね。お電話がありましたら、そうお伝えします」

「ああ、頼んだよ。綾ちゃんも二ヶ月ですっかり頼もしくなったね」

社長にそう褒められ、綾子は嬉しくなって顔を綻はせた。

その後、經理の小池と海外出張中の営業部長を除いた、三人の社員が出社した。いつもどおり社長のデスクの前で朝礼を済ますと、それぞれ慌ただしく出掛けていく。その後、社長もオフィスを

出ていった。

綾子はパソコンに向かい、営業に頼まれた資料を作成したり、商品データや画像の処理をしたりしながら、時々掛かってくる電話に対応する。アポなしの来客は滅多にないので、彼女の一日は比較的のんびりとしたものだ。

手が空いたので、書類を整理したりデスクの上を掃除したりしていると、時計の針はいつの間にか十一時半を指していた。

正午になったら珈琲を淹れて、『喫茶あずさ』のマスターが作ってくれたサンドウィッチを食べよう。そんなことを思いながら、窓辺にいた綾子は何気なく外を見下ろした。

すると、ビルから出ていく猪野の姿が目に入った。そして――

「……」

猪野の隣には、彼に親しげに話しかける女性の姿があった。

明るめの長い髪をなびかせた、スーツ姿の女性。猪野の隣がよく似合う、大人の女性だ。

それを見た綾子は、誰もいないオフィスの中で大きなため息をついた。

（そうか、私は特別じゃなかったんだ……）

ランチに誘ったのは『喫茶あずさ』で縁があったからという気まぐれに過ぎなかったのだろう。

猪野にとつて綾子は、ただ一度、ランチをしただけの相手。

きつと彼には、そういう相手がたくさんいるのだ。

（またね は社交辞令なんだ……勘違いしちゃ、だめだめ）

綾子はそう自分に言い聞かせたが、がっかりした気持ちは誤魔化せなかった。

気分を変えようと自分の席に戻り、マスターが持たせてくれたサンドウィッチの袋を覗き込む。

そこには、猪野から受け取ったメールアドレスのメモが入っていた。

綾子はそれを握り潰し、くしゃくしゃにして捨ててしまおうかと思った。

しかし、できなかった。

仕方なく、メモを小さく折り畳んで財布の中に入れてしまう。

その後食べたサンドウィッチは、味がよく分からなかった。

午後五時を回ると、社長が予定通りオフィスに帰ってきた。

それに続くように帰社した女性の営業、山路咲和子は、デスクに座るなり綾子を呼びつけた。

「アヤー、このあと合コン行くよ！」

「え？」

「会社の後輩連れてくつて、もう言っちゃったから。あんた強制参加ね」

「え〜!？」

咲和子がかつて、夜の街で一、二を争う売れっ子ホステスだったらしい。たまたま接待でクラブを訪れた社長が、彼女の明るい人柄と巧みな話術に惚れ込んだという。そして、自分の会社で働か

ないかと熱心に口説いたのだ。咲和子の方も、長く続けられる仕事への転職を考えていたようで、それを受け入れた。

彼女は目鼻立ちのはつきりした華やかな美人で、綾子を妹のように可愛がっている。

「咲和子さん、連れていくのはいいけれど、ちゃんと綾ちゃんの面倒見てあげてね」

「任せてください、社長！ アヤにいい男ができたなら、社長にもちゃんと報告しますから！」

「あんまり飲ませてはだめだよ？ 帰りも遅くならないようにね」

「はあーい」

心配そうな社長に、咲和子は胸を張って答えると、すぐさま営業日報をまとめ始める。

営業の男性二人は、本日、直帰予定。綾子達も、定時の六時で上がることになった。

タイムカードを押し、まだ何か言いたそうな社長に見送られてオフィスを出る。

咲和子はそのまま綾子を引かずって、三階フロアにある化粧室に飛び込んだ。

「咲和子さん、私、このままの格好でいいの？」

「いいわよ、あなたは充分可愛いから。リップだけ塗り直しときな」

パンツスーツからエレガントなワンピースに着替えながら、咲和子が言う。

この日の綾子の服装は、首元のフリルとフレアスリーブがフェミニンなワンピース。下ろしたままだった髪は、咲和子が手早くハーフアップに結ってくれた。

そうして綾子が連れていかれたのは、猪野ビルからほど近い場所にある居酒屋だった。

「咲和子さん、実は……私、合コンって初めて……」

「えっ、マジで!？」

気まずそうな綾子の告白に、咲和子は信じられないと目を剥いた。

綾子は合コンだけでなく、異性とお付き合いしたこともない。

男友達はそれなりにいたし、兄の友達にも親しくしてもらっていたが、恋が芽生えるような出会いはなかったのだ。

「もう、このお子ちゃまめ！ せっかく一人暮らしを始めたんだから、恋をしなさい！ 自由に生きるのよー！」

「ええー」

「幸い、今日の相手はなかなかの優良物件よ。森野インテリアっていう、結構大きな会社の営業男子。もうすぐ来るわよ」

森野インテリアの本社も、この居酒屋からそう遠くない場所にあるらしい。

男性陣がやってくる前に、咲和子と呼んだ女子メンバーの二人がやってきた。

この二人とは、営業先で知り合っって意気投合したのだという。綾子がたじたじしてしまうほど美人揃いだ。

自分が場違いに思えてきて「帰りたい」と呟くと、目をくわつと見開いた咲和子に首根っこを掴まれた。

「何、怖じ気づいてんのよ！ そんなんじゃ、いつまで経っても彼氏なんかできないわよっ！」

「だってー」

「アヤはそのままでも可愛いんだから、自信持ちなさい。とにかく、今日の相手は素性のはつきりした男ばかりだから、お持ち帰りされない限り危ないこともないわよ」

「お持ち帰りって……」

「それに、全額向こう持ちの約束なのよ。夕飯とお酒をごちそうになるだけだと思って、楽しんで」

そうこうしているうちに、男性陣の四人も到着した。

全員きつちりとしたスーツ姿で、仕事ができる男達といった感じだ。

お互い軽く自己紹介し、まずはビールで乾杯する。つきだしをついついてる間に、仕切り役の咲和子がぱぱっと料理を注文した。さすが究極の接客業に就いていただけであり、人一倍手際がいい。

その後、彼女の音頭で男女の席がシャッフルされ、綾子の隣にも男性が座った。

「はじめまして。君が、山路さんご自慢の後輩さんかな？」

「あ、はじめまして……」

黒い髪を後ろに撫で付けて眼鏡をかけた彼は、綾子の上の兄とどこか雰囲気似ていた。

他の男性三人が彼に敬語を使っていたので、男性陣の中では一番年上なのだろう。

細い眼鏡フレームの奥の瞳は優しく、少しだけ綾子の緊張も解れた。

「龍田さん、その子つてば天然記念物なみに初心ですからあ。お手柔らかにお願いしますね」

綾子の向かい側の席からそう声を掛けた咲和子は、どうやらお目当ての男性の隣を確保したらしい。いつもより高い声で喋っている。

龍田と呼ばれた男性は咲和子の言葉に苦笑すると、胸ポケットから名刺を取り出して綾子に渡した。

そこに書かれていたのは、『株式会社森野インテリア 営業部長』という肩書き。

(若いのに、部長なんてすごい)

その時、綾子は財布にしまっている一枚の名刺を思い出した。

若くして重役に就いているその名刺の主の顔が浮かび、胸の奥がズキリと痛んだ。それと同時に、腹の奥から湧き上がってきたもやもやとした感情を振り切るように、目の前に置かれたビールの小ジョッキをあおる。

ぐびぐびと喉を鳴らして中身を飲み干し、ビールのCMよろしく「ぶはー！」と息をついてから、

綾子はぽつりと呟いた。

「にがい……」

「全部飲んでから言う言葉じゃないよね」

綾子の豪快な飲みっぷりに目を丸くしていた龍田は、「ぶっ」と噴き出した。

「ビール苦手だったの？ ええっと……」

「あ、里谷です。すみません、名刺は持っていません……」

「ああ、気にしないで。里谷さん、下の名前を聞いても？」

彼の問いかけに「綾子です」と答えつつ、綾子の胸はまた疼いた。

龍田の柔らかい口調と優しい眼差しに、どうしても猪野を重ねてしまう。

こんなの、おかしい。猪野とは一回ランチをしただけで、そもそも四日前までは言葉を交わしたこともなかったのに。

猪野の存在が自分の心に深く入り込んでいたことに気づき、綾子はひどく戸惑った。困り顔の綾子を見て何を思ったのか、龍田はビールのおかわりを頼むついでに、サワーを注文してくれた。

ゆずとハチミツの入った喉ごしの爽やかなサワーは、綾子の好みにはぴったり合う。ただ、ジュースのようでおいしい、と思ってしまったのがいけなかった。

実家の方針で大学卒業まで飲酒を許されなかった綾子は、自分のアルコールに対する耐性や限界を、まったく把握していなかったのだ。

顔がすぐに赤くならない体質も災いし、機嫌良くグラスに口をつける彼女が酔っていることに、龍田も気づかない。グラスが空くたびに、彼はおかわりを頼んでくれる。

最初は硬かった綾子の表情が解れ、人懐っこい笑みを向けてくることに、彼も気をよくしていたのだ。

「綾子ちゃん、可愛いね。今日、本当は乗り気じゃなかったんだが、断らなくてよかったよ」
ビールを数杯おかわりしながらもまったく酔った気配のない龍田は、ふわふわした笑みを浮かべる綾子を見て目を細めた。

他のメンバーも、それぞれパートナーを確保して楽しく飲んでる。

綾子の保護者役である咲和子もまた、目当ての相手といい感じに盛り上がっている様子。

可愛い後輩が酔っぱらって、前後不覚の状態になりつつあることなど知りもしない。

そんな中、龍田はスーツの内ポケットから財布を取り出すと、一万円札を四枚抜き取り、「これで支払っておいてくれ」と近くの同僚に渡した。

「場所を変えて、二人で飲もう」

龍田はそう囁き、綾子の肩を抱いて立ち上がる。

これこそ回避すべき「お持ち帰り」である。しかし、綾子を止めてくれる声は誰からも上がらない。咲和子でさえ、酒と目当ての相手に夢中で、席を立った二人に気づかなかった。

「少しだけ、待っていて。タクシーを拾ってくる」

居酒屋を出ると、龍田は店先に置かれた椅子に綾子を座らせ、大通りへとタクシーを拾いにいった。

酔いが回った綾子は、言われるがままに、ぼうつと椅子に座っていた。すると彼女の耳に、突然聞き覚えのある声が届いた。

「——里谷さん……!!」

声が出た方にのろのろと顔を向けると、そこには息を切らした猪野の姿があった。

綾子はとろんとした表情で目を緩慢に瞬かせ、首を傾げる。

「あれえ……猪野さん〜?」

「……酔ってるね。こんな所で何してるの?」

「待ってるの。龍田さんが、タクシー拾ってくるからって」

「たつた？」

「二人で飲もうって」

「男か……！」

くそつ、と悪態をついた猪野は、きよとんとしている綾子の腕を取って立ち上がらせ、歩き始めた。

しかし彼女の足元が覚束無おぼつかまいことに気づくと、猪野はぐつと支えるように肩を抱いた。

「……待ってって、言われたのに」

「それで、その龍田って奴に食われて、君は本望なのか？」

「くわれる……？」

「まんまとお持ち帰りされそうになっていたのが、分からないのか」

「おもちかえり……」

密着した猪野の身体が熱い。ふと見上げれば、彼は何故か怒っているようだった。

仕事帰りのビジネスマンの合間をぬって、彼は猪野ビルに向かう。到着すると、彼は玄関ホールではなく、地下駐車場へと綾子を連れていった。

地下の駐車スペースは限られており、その大半が来客用だが、猪野商事の重役用にも数台分確保されている。

その内の一つに停められていた黒いボデイの高級車が、猪野の車のようだ。

ボンネットには、車に詳しくない綾子でも知っている有名な外国車のエンブレム。

綾子は有無うぶを言わず助手席に押し込まれ、運転席にはすぐさま猪野が乗り込んだ。

彼は、助手席の方に身を乗り出してくる。

「猪野さん……？」

そして彼は綾子に覆おほいかぶさるようにして、彼女の身体をシートに強く押し付けた。

「龍田って奴が好きなのか。一緒にタクシーに乗って、ホテルにでも行くつもりだった？」

「ホテル？ ……ううん、場所を変えて飲もうって」

「本当に飲むだけだと思ってんの？ 飲んだ後、こんなに酔っぱらった君をそいつがどうするか、考えてみるよ！」

「猪野さん……」

今朝会った時の柔らかな雰囲気嘘のように、猪野は荒々しく怒鳴った。

そんな彼に驚きはしたものの、まだ酔いの醒さめない綾子は、今の状況を把握しきれていない。ついでに言うと、血の気の多い兄が二人もいるので、少し怒鳴られたくらいで怯おそむほど、やわでもない。

猪野の言葉を頭の中で繰り返した綾子は、しばらくしてようやく彼の言いたいことを理解した。

酔った綾子が、龍田によってホテルに連れ込まれていたかもしれない、と言っているのだ。

綾子はさすがに息を呑んだ。

しかし、その後の彼の言葉は、さらに衝撃的だった。

「それとも君は、誰にでもほいほいついていくような子なのか？ あどけない顔をして、男の誘い

には簡単に乗るの？」

「なっ……」

「都会に不慣れな様子も、もしかしたら演技だった？ だったら俺は、見事に騙されたな」

「——！」

あまりの言われように、綾子の頭にカツと血が上った。酔いで気が大きくなっていたこともあり、覆いかぶさっている猪野を睨みつけると、その胸をドンと押した。

「何で、猪野さんにそんなこと言われなきゃならないんですか！ 関係ないでしょ！」

「関係なくなんかない。俺は、君をまたランチに誘いたいと思っていた。けれど、パトロンの一人だと思われのはごめんだ」

「パ、パトロンなんて、いませんっ！ 猪野さんのことも、そんな風に思ってませんっ！」

綾子にとつて、先日の猪野とのランチは、とても素敵なひとときだった。

料理はおいしかったし、彼との会話も楽しかった。

また誘うと言ってもらえて、綾子は本当に嬉しかったのだ。それなのに——

「猪野さんこそっ、ランチに誘う女の人がいっぱいいるんでしょ！ 私には、気まぐれで声を掛けただけのくせにっ！」

「は？」

自分の発した言葉で、綾子は急に惨めな気分になった。感情が高ぶり、涙が滲んでくる。

そんな姿を見られたくなくて、「関係ないんだから、もうほっといてください」と呟いて俯く。

そして綾子は、助手席のドアを開けようとした。

しかし、その手を強い力で掴まれたかと思ったら、再び身体を助手席のシートに押し付けられる。薄暗い地下駐車場の車内。彼の瞳が爛々と輝いているように見えて、この時初めて綾子は震えた。

「関係なくなんて、ない。放つてなんて、おけるもんか」

「……」

「君が、その龍田とかいう男に食われるのかと思うと、腸が煮え繰り返りそうだ」

「猪野さん……？」

彼が吐き捨てるように言った言葉の意味を、綾子は酔いの醒め切っていない頭で考えようとする。ところが突然、緩く開いていた彼女の口が塞がれた。

「んっ……？」

柔らかいものがぐっと押し当てられ、綾子の無防備な唇の間を何かが掠める。綾子がキスをされたのだと認識する前に、猪野は彼女の舌先をべろりと一舐めして唇を離した。

「……甘いね、何を飲んだの？」

「えっと……ビールと、龍田さんが頼んでくれた……ゆずとハチミツのサワー……」

「くそっ……聞くんじゃなかった！」

綾子が龍田の名前を口にしたとたん、彼女の唇は再び塞がれてしまった。

薄くリップグロスを塗った唇が抉じ開けられ、今度は舌が中までぐっと割り込んでくる。

その初めての感触に驚き、綾子はわずかに身体を竦ませる。するとそれを宥めるように、猪野の

掌が綾子の肩を優しく撫でた。

「……っん……」

思わず漏らしてしまった、鼻に抜けるような甘い声。ふわふわと酔った綾子は、そんな自身の声はどこか遠くから聞こえてくる気がした。

「くふっ……っん……」

ぐっと肩を抱かれ、キスが深まる。

猪野の舌は熱く、それに弄ばれる綾子の舌は、酔いのせいでもっとずっと熱かった。

覆いかぶさる温もりと安定感のある車のシートに全てを預け、やがて綾子は意識を手放した。

「……は……」

目を覚ますと、綾子はシートベルトをして助手席に座っていた。

高級感漂う車内はエンジン音が静かで、シートに伝わる振動も少ない。

ぼんやりと窓の外に目を向けてみる。車は大きな通りを走っているようだった。すると突然、隣から声が掛かった。

「……起きた？」

「あれ？ 猪野さん……？」

「あれ……じゃないよ、この子は……。無防備にもほどがある」

「え？」

はあ、とため息をついた猪野に、綾子は首を傾げる。

そして、きよろきよろと周囲を見回すと、「どこへ行くんですか」と尋ねた。

「君を家まで送りたいんだけど、さすがに住所までは分からなかったんでね……」

「え、住所まで？」

ここで綾子は、居酒屋を出た後のことをようやく思い出した。

そういえば猪野はあの時、どうして居酒屋の前に現れたのだろうか。

たまたま通りかかり、酔っぱらった綾子を見つけて保護してくれたのだろうか。

信号が赤になったタイミングでそれを尋ねると、彼はばつが悪そうな顔をしてハンドルに突っ伏してしまった。

「実はね、君の勤めている会社の社長は……俺の祖父なんだ」

「えっ!？」

猪野の話によると、綾子の勤める Mon favori の社長——猪野耕平は、猪野商事の前社長なのだという。五年前に息子に社長の座を譲った後、突然小さな会社を立ち上げたので、周囲はたいそう驚いたそうだ。

「君の雇い主が祖父だって聞いて、これ幸いと協力をお願いにいったよ」

「え？」

「経理の小池さんにも協力してもらって、まんまと君をランチに連れ出した」
「ええっ？」

小池や海外出張中の営業部長も、元は猪野商事の社員で、猪野とは顔見知りだった。小池は彼と社長に頼まれて、綾子が昼休みをゆつくり外で過ごせるように取りはからってくれたのだという。

「さつき会議が終わって携帯をチェックしたら、祖父から留守電が入っていてね。君が合コンに引つ張り出されたって聞いて、慌てて会社を飛び出したんだ」

「じゃ、社長が……？」

「君の先輩は、律儀りちぎに居酒屋の名前まで祖父に伝えていってくれたみたいだね。会社から近い店で助かったよ」

それから猪野は、綾子に「もう遠慮しない」と宣言した。

今後はランチ限定ではなく、ディナーにだって誘うと言い出し、綾子を困惑させる。

「俺と飯めしを食うのが嫌なら、遠慮せずにそう言ってくれていい。懲こりずにまた誘うと思うけど」

「こ一緒するのが嫌とかじゃ、ないです。でも……」

「でも、何？」

「だって……」

「だってじゃ分らないよ。ちゃんとやって」

気がつくくと、猪野の一人称が「僕」から「俺」に変わっていた。

最初は穏やかで優しい印象だったのに、今はひどく威圧的で逆らえない感じがする。

綾子は俯うつむいて、ぼそぼそと呟つぶやいた。

「私……ランチに同伴する女のうちの一人になんて、なりたくないんです」

「は？ それってどういうこと？ そういえば、さつきもそんなこと言ってたよね？ 俺にはランチに誘う女がいっぱいいるとか、気まぐれで君に声を掛けたとか」

「……」

「ちよっと、そこを詳しく聞かせてもらおうか——」

猪野はそう言うと、車を道路沿いのコンビニの駐車場に入れた。そしてエンジンを切り、シートベルトを外してハンドルの上で腕を組むと、助手席の綾子をじつと見つめて先を促うながした。

車内の時計を見れば、時刻は午後十時前。

綾子はふと、合コンはもうお開きになって咲和子は帰っただろうか、置いてきぼりにしてしまっただ龍田はどうしただろうか、などと考えた。

ぼんやり俯うつむいていると、猪野の手が顎あごに伸びてきて、顔を上げさせられる。

綾子は仕方なく、今日の昼休みに、彼が女性と連れ立って出掛けていくのを目撃したと打ち明けた。

窓辺から見下ろした、親しげな二人の様子を思い返す。

すると、再び胸がずきりと痛み、綾子は思わず胸元を手で押さえた。

一方、それを聞いた猪野は合点がてんがいったように頷うなずき、相好そうこうを崩した。

「——綾子」

「……え？」

「祖父もマスターも、君のことアヤちゃんと呼ぶだろう。皆と同じは嫌だから、俺はこう呼ぶと決めた」

「え？」

「俺のことも姓で呼ぶのは無しね。あのビル、他にも猪野がいつばいいから」

「えっと……」

「忍って呼んで。中性的な名前で、実はちょっとコンプレックスだったんだけど、綾子には呼んでほしい」

「あの……」

「ねえ、綾子」

——他の女と歩いているのを見て、嫉妬した？

耳元で低く囁かれ、綾子は唇をぐつと噛み締めた。

「……嫉妬かどうかは、分からないけれど。……でも、いやだなんて、思いました」

「うん」

「それに、その人は猪野さんの隣がすごく似合っていて、羨ましいなあっていうのも、少し……」

「猪野じゃなくて、忍だってば」

綾子が声を震わせると、運転席から身を乗り出してきた猪野が、そっと彼女の頬に口付けた。さ

すがにもう酔いが醒めていた綾子は、びくりと竦み上がる。

「あのね、彼女は二つ下の妹」

「……いもうと？」

「ああ。普段はアパレル部門のバイヤーとして海外を飛び回ってる。久しぶりに本社に寄ったんで、昼飯に連れていったんだ」

「そ、そうだったんですか……」

「一番一緒にランチに行きたかった子には、すでにフラれていたからね」

猪野はそう言うと、目をぱちくりさせている綾子に顔を近付け、今度は唇にキスをした。

「仕事以外で女性を飯に誘うことなんかないし、君を誘ったのだからって気まぐれなんかじゃないよ」

「どうして……私？」

「ずっと、気になってたんだ……綾子のこと」

立て続けのキスに、綾子の頬は熟れたリンゴのように真っ赤だ。

猪野はそれを愛おしげに見つめながら、彼女に声を掛けた理由を話し始めた。

綾子が『喫茶あずさ』に通うようになるずっと前から、猪野はその常連客だった。

気安いマスターの淹れる美味しい珈琲を飲みながら、朝刊を隅々まで読むのが日課。

そんな彼は、ある朝やってきた新しい客に興味を持った。

まだ少女っぽさが残る、いかにも新入社員ですといった様子の女性。彼女はいきなりカウンター席に案内されて戸惑った様子だったが、あつという間に強面のマスターに懐き、毎朝顔を見せるよ

うになった。

流行りのカフェとは違う『喫茶あずさ』の常連客は、ほとんどが中高年のビジネスマン。マスターが「アヤちゃん」と呼ぶ彼女の存在は、随分と浮いて見える。

そしていつの頃からか、猪野は彼女の瞳が自分に向けられていることに気づいた。時々、ちらちらと感じる視線。しかし彼は、それを不快に感じていたわけではなかった。

いつも顔の前で新聞を広げているので、目が合うこともない。ただ、自分の何が彼女の興味を引いているのだろうと、猪野も彼女のことを気になり始めた。

綾子への想いが膨らみ、彼女が店を出るのに合わせて席を立ったのが、先週の金曜日の朝だった。「ねえ、綾子。俺の何に興味を持った？ どうして、あんなに俺を見たの……？」

「そ、それは……」

「おかげで俺も、綾子が気になって気になって仕方がなかったんだよ。ねえ、どうして？」

「あ、あの、その……実は……」

耳元で囁く猪野に、綾子はしどろもどろになりながらも話し始めた。

薄暗い奥のソファ席で新聞を読みふけていることが、どうにも気になっていたのだと。

「……え？ 新聞を読んでいるのが、気になっていただけ……？」

「ええっと、うちは祖母がそういうのにうるさくて。暗い所で本を読むなーとか、食べながら読むなーとか……」

「つまり……君は俺の行儀の悪さをずっと気にかけてたってこと……？」

「いえ、行儀が悪いというか……ええっと、目が悪くならないかなって……」

「それは……ご心配ありがとうございます……」

猪野は呆然としながら身体をのろのろと起こし、大きく息を吐き出した。

そして運転席に座り直すとハンドルに突っ伏し、さらに深いため息をつく。綾子の視線の理由は、彼にとつて想定外だったようだ。

「猪野さん」

「……」

名前を呼んでみるが、猪野はうんともすんとも言わない。

困った綾子は、少し逡巡した後、頬を染めつつ口を開いた。

「し、しのぶ……」

「——綾子」

現金なことに、名前で呼ばれたとたん、猪野はハンドルからぱつと顔を上げた。

しかし、その後の綾子の言葉を聞いて顔を引きつらせる。

「忍ちゃん」

「……」

年上の男性を呼び捨てにするなんて、綾子にはできなかった。それなら「さん」を付けて呼べばよさそうなものだが、その時ぱつと綾子の頭に浮かんだのが、『喫茶あずさ』のマスターが猪野を呼ぶ姿であった。

猪野はその呼び方が不満なようで、口をへの字にして眉を寄せている。その表情は不貞腐れた子供みたいで可愛らしい。綾子は「ふふ」と小さく笑って続けた。

「あのね、ランチに誘ってもらえて嬉しかったんです。お喋りも、とても楽しかった」とすると、不機嫌だった猪野の顔が綻ぶ。

「そうか」

十歳も年上の大人の男性だが、意外と感情を隠さないのだな、と綾子は思った。

「また、っていうのは社交辞令だと思っただけなんです、本当はまた一緒にできるといいなって楽しみにしてたんです」

「社交辞令なんかじゃないよ！ その気がないのに、あんなにしつこく誘うものか！」

再び身を乗り出した猪野は、綾子の肩に優しく手を添える。

その温もりに少しだけ頬を赤らめた綾子は、すぐ近くにある彼の顔を見つめて、そっと尋ねた。

「また……ランチに連れていってくださいますか？」

「もちろん」

その翌朝より、猪野、改め忍は、『喫茶あずさ』の薄暗いソファ席ではなく、明るいカウンター席で新聞を広げるようになった。彼の隣にはもちろん、綾子の姿があった。

3

忍に送ってもらった日の翌朝。綾子は彼と『喫茶あずさ』で隣り合って座り、楽しい朝のひとつきを過ごした。

綾子が始業時間の十五分前に出勤すると、温和な笑みを浮かべた社長が手招きをした。

「私の……名刺、ですか？」

「そうだよ、遅くなってごめんね。この間、忍に言われて、はっとしたよ」

綾子は今まで名刺を持っていなかったが、内勤ということもあり、その必要性も感じていなかった。

しかし今後は必要になることもあるだろうと、忍が社長に進言してくれたらしい。

生まれて初めての自分の名刺に、綾子は顔を輝かせた。

「社長、ありがとうございます！」

「うんうん、こんなに喜んでもらえるなら、もっと早く作ってあげたらよかったねえ」

社長は真新しい名刺の束とともに、お洒落な名刺入れをプレゼントしてくれた。

綾子はそれらを両手で握り締め、自分は社会人になったのだと改めて実感する。財布に入れたままの忍や龍田の名刺も、後でこのケースにしまっておこう、などと考えた。

ところが、満面の笑みで自分の名刺を眺めていた綾子は、ふとあることに気づいた。
「……あれ？」

彼女は表情を一変させ、戸惑った様子で社長に尋ねた。

「あのう……社長？ これって……」

その日の昼休み。

綾子は忍と一緒に近くの寿司屋で昼食を取り、『喫茶あずさ』で食後の珈琲を楽しんでいた。
一息つくと、綾子はさっそく自分の名刺を忍に進呈した。

彼は「ふむ」と頷いてそれを眺め、面白そうな表情を浮かべる。

「綾子、いつからじいさんの秘書になったの？」

「知らないうちに、名刺の上ではそうなっていました……」

名刺には、『株式会社 Mon favori 社長秘書 里谷綾子』と記されている。

「……これはいい虫除けになりそうだ」

「え？」

できる女を連想させる、社長秘書 という肩書きは、名刺を受け取った相手をいくらか身構えさせるだろう。忍としては、祖父が戯れに綾子に与えたその肩書きがあった。

まだあどけなさを残す新社会人の綾子は、忍の目から見ると危なっかしいのだ。

綾子が合コンで酔っぱらい、初めて会った男に危うくお持ち帰りされそうになったのは、昨夜の

こと。

そんな彼女を保護してマンションまで送り届けた忍は、「お礼にお茶でも」と部屋に誘われた。
女性が一人暮らしをしている部屋に、男を招き入れるとはどういうことなのか。

綾子は何も分かっていないのだと知り、忍は危機感を募らせた。

「気軽に男を家上げてはいけない。男の車に簡単に乗るのも、だめだよ」

忍は自分のことを棚に上げて、綾子を叱った。そして彼女がオートロックの扉をくぐるのを見届け、ようやく帰途についたのだった。

一方、忍と同じように綾子の名刺を受け取った人物も、口を開いた。

「アヤちゃんが秘書か……。秘書つてさあ、ちよつと背徳的な感じがしない？ 秘めたる書だよ。雑誌の袋とじ部分っばいよね」

頬を染めて妄想を巡らせるのは、おなじみ『喫茶あずさ』のマスターである。

黒髭に囲まれた口から飛び出したセクハラ発言に、綾子が目を丸くする。

忍はため息をつき、にやにやするマスターを睨んで言った。

「綾子、ハゲの言うことは気にしないでいいよ」

「ちよいと、シノブちゃん！ なんだい、その敬意の欠片もない言い草は！ この光沢を保つために、僕が毎朝、手入れにどれほど時間をかけていると思ってるの！」

マスターはぶーぶーと抗議するが、忍はスキンヘッドについて話し合うつもりなどない。

彼は隣に座った綾子の椅子の背に手をかけ、くると回して自分の方を向かせる。

「それで、昨日の男は何か言ってきた？」

「え？」

「龍田って男」

「あ、えっと……」

綾子の名刺を胸ポケットにしまいつつ、忍はずっと気になっていたことを聞いた。

昨夜、車内で綾子が眠りこけた後、忍は Mon favori の社長である祖父に連絡を入れていた。

祖父はその後、綾子の不在によく気づき慌てふためいていた彼女の同僚に連絡し、綾子が無事であることを知らせた。

「今のところは、何も。私が帰ったことは先輩が伝えてくださったようなんですが、やはり謝罪のお電話を差し上げた方がいいでしょうか？」

龍田の勤める森野インテリアは、Mon favori の大口の顧客。

そんな大手取引先の営業部長である龍田に失礼なことをしてしまったのではないかと、綾子は気に病んでいた。

「その必要はないよ。昨夜は、仕事絡みの飲み会じゃなかったんだろう？」

「はい……」

「そもそも、新入社員の女の子を酔わせて持ち帰ろうとするなんて、恥を知れと言つてやりたい」ムツとした表情でそう言い放った忍に、マスターは呆れながら突っ込んだ。

「シノブちゃんだって、アヤちゃんを自分の車に乗つけて連れ去ったくせにー」

「俺は、ちゃんと家に送り届けた」

とはいえ、忍もかなり強引に綾子の唇を奪ったわけで、龍田に大きな顔はできないだろう。

何も知らないはずなのに、マスターはサングラスを光らせて、カフェオレをすする綾子に話しかけた。

「アヤちゃん、シノブちゃんに何かされなかった？」

「何か……？」

彼女を問いつめようとするマスターに、忍は「おい、やめろ」と凄む。

しかしマスターは怯むことなく、カウンターから身を乗り出して続けた。

「おじさんはいつだって女の子の味方だよ。昨夜車の中で、一体どれほど破廉恥なことをされたのか、ちよっと話してごらん」

「はれんち……？」

綾子は首を傾げてぼちぼちと目を瞬かせ、何かを考えるような素振りをした。

そして、おもむろに片手を唇に持っていく。

その仕草にびんと来たらしいマスターは、綾子に顔を近付けてそっと耳打ちした。

「例えば——キスとか？」

「キス……」

「おい、粹！ いい加減にしろっ！」

たまらず忍が声を荒らげると、黒髭に囲まれた口がにいつと弧を描く。

一方、男二人の顔を見比べていた綾子は、いささか呆然とした様子で呟いた。
「キスって……あれ、本当だったんですか？」

「え」

「……夢だと思ってました」
「……」

忍は頭を抱えなくなった。
彼は昨夜、確かに綾子にキスをしたのだ。

酔っぱらっていた時の一回を彼女が憶えていないとしても、酔いが醒めてまともに話ができるようになってからだって、頬と唇に一回ずつ口付けた。

今朝この『喫茶あずさ』で顔を合わせた時も、一緒にランチをしている時も、綾子が忍を特別意識している様子はなかったのです、少しおかしいとは思っていたのだ。

それがまさか、彼女が昨夜のキスを夢の中の出来事として片付けていたなんて。
忍は愕然とした。

十歳も年下の相手を好きになったのは初めてで、何もかも勝手が違い、戸惑うことばかりだ。
引きつりそうになる顔を何とか苦笑の形にとどめると、忍は極力穏やかな声で言った。

「間違いなく本当のことだよ。夢だなんて思ってもらっちゃ、困る」
「そうですか……夢じゃなかったんですね……」

次の瞬間、綾子の顔がみるみる赤くなった。昨夜の忍とのキスを思い出したのだろう。

これこそ、忍が期待していた反応だ。

彼は綾子の真っ赤な顔を見つめて、ああ、可愛い……と心の中で悶えた。

カウンターのの中からそんな二人を眺めていたマスターは、エスプレッソを一口飲んで、ぼそりと呟いた。

「シノブちゃん、手え早っ……」

『喫茶あずさ』を出ても、綾子の頬はまだ赤かった。
その隣を歩く忍は、上機嫌だ。

二人は当たり前のように連れ立って猪野ビルに戻り、エレベーターの中で別れた。

綾子がエレベーターを降りると、化粧室から歯磨きセットを片手に小池が出てきた。

一緒にオフィスへ戻ると、電話が鳴り始めた。綾子は慌てて受話器を取る。

「お電話ありがとうございます。モン・ファヴォリの里谷です」

彼女が名乗った瞬間、電話の向こうで息を呑むような心配がした。

綾子は相手の沈黙に戸惑い、「あの……」と声を掛ける。

「ああ、失礼」と慌てて詫言したのは、低くて穏やかな男の声だった。

聞き覚えのある声に綾子が首を傾げると、その人物が名乗った。